■論　文■

十字架の血による平和：コロサイ1:9-23の釈義的・神学的研究[1]

原　口　尚　彰*

抄　録

コロサイ書の著者は、使徒パウロの十字架の神学を継承しつつ、独自の十字架論を展開した。彼は祭儀的な血による贖いの表象を十字架論と結合させ、「十字架の血」が贖いと罪の赦しを与える結果、神と世界の和解をもたらしたという結論に到った（レビ 16:13-19 を参照）。神は「御子を通して万物を御自身と和解させ、地上の事柄であろうと、天上の事柄であろうと、その十字架の血を通して平和を創り出した」のである（コロ 1:20; さらに、ロマ 5:1-11; エフェ 1:7; 2:13 も参照）。I コリント書やガラテヤ書においてパウロは、論敵たちの自分とは異なる福音理解に対して、対決の原理として十字架の言葉を対置した（I コリ 1:18-25; ガラ 3:1-5）。しかし、コロサイ書にあって十字架論は対決の原理と言うよりは、世界に平和と和解をもたらす統合の原理として機能している。

Keywords：コロサイ書，十字架，祭儀，和解，平和

はじめに

新約聖書学において十字架の神学はパウロ神学の最重要テーマの一つと評価され、ドイツや日本の研究者を中心に研究が続けられて来た[2]。筆者もパウロの十字架の神学が集中的に展開されている第一コリント書やガラテヤ書の代表的な箇所については、他の機会に再三論じてきた[3]。今回はパウロの第一コリント書やガラテヤ書の十字架論を再確認しながら、第二パウロ書簡であるコロサイの信徒への手紙（以下、コロサイ書と略記する）における十字架論の特質を、コロサイ 1 章 9-23 節の本文に即して釈義的・神学的に明らかにしたい。

I．コロサイの町とコロサイ教会

本書簡は、パウロとその同労者テモテより（コロ 1:1; さらに、II コリ 1:1; フィリ 1:1; I テサ 1:1;

＊ Haraguchi, Takaaki
フェリス学院大学文学部　教授
日本ルーテル神学校　非常勤講師

フィレ 1 も参照)、「コロサイの聖なる、キリストを信じる兄弟達」、即ち、コロサイ教会の信徒たちへ宛てられている（コロ 1:2)。コロサイはアジア州フリギア地方の町で、隣接するラオディキアやヒエラポリスと共に、メアン川の支流のリュコス川沿いに立っていた。紀元前 5 世紀頃にコロサイは羊毛の産地として繁栄した都市と記されており（プリニウス『博物誌』21.51)、ペルシア王が遠征の途中に立ち寄った場所として言及されている（ヘロドトス『歴史』7.30; クセノフォン『アナバシス』1.2.6）[4]。時代が下ってローマ共和制末期から帝政期になると、コロサイは地理学的記述にアジア州の主要な町として言及されてはいるが（ストラボン『地誌』12.8.13)、隣接するラオディキアやヒエラポリスの方が行政的にも産業的にも重要な都市となっていた[5]。

コロサイ教会はパウロ自身の開拓伝道による教会ではなく、同労者のエパフラスの宣教（コロ 1:7-9; 4:12-13; さらに、フィレ 23 も参照）に起源する。会員の多くは福音宣教の言葉を聞いてキリストを主として受け入れ信仰に入った異邦人信徒であった（1:27; 2:1-13; 3:10-11）[6]。コロサイ教会はラオディキアやヒエラポリスにある諸教会と近い関係にあった（2:1; 4:15-16）[7]。コロサイ書もラオディキア教会へ回付され、それぞれの教会の集会で朗読されることを予定する公的書簡の性格を持っていた（4:16)。尚、ラオディキア教会は、黙示録冒頭にある天上のキリストから小アジアの七つの教会へ宛てた書簡の中で言及され、その信仰が「熱くも冷たくもなく、生ぬるい」と叱責されている（黙 3:14-22)。この時点でラオディキア教会の方が論評の対象になったということは、コロサイ教会よりもこちらの方が有力な教会となっていたからであろう。

Ⅱ. コロサイ書の執筆目的と書簡類型

この書簡は、当時のコロサイ教会に存在した様々な異端的傾向に警告すると共に（2:6-23)、キリスト者としての社会生活に関する具体的な勧告を与えることにあった（3:1-4:6)。従って、この書簡は、ギリシア・ローマ世界の書簡類型から言えば、『勧告的書簡』に相当する (偽デメトリオス『書簡タイプ論』第 11 類型、偽リバニオス『書簡形式論』第 1 類型）[8]。

Ⅲ. 内容構成

コロサイ書は、パウロ書簡の定型に従って執筆されており、以下のような内容から構成されている。

1:1-23 導入部
　1:1-2 前書き：発信人、受信人、祝祷句
　1:3-23 感謝の祈り
　　1:3-8 神への感謝
　　1:9-23 取りなしの祈り
1:24-4:6 本文
　1:24-2:5 宣教者の務め：苦難と神の秘儀
　2:6-23 哲学的思弁や霊力の礼拝やユダヤ的祝祭日や安息日の遵守に対する警告
　3:1-4:6 倫理的勧告：家庭訓
4:7-18 結び
　4:7-17 挨拶
　4:18 祝祷句

Ⅳ. 解釈

4.1. 私訳

1[9] それだから、私たちもまた（そのことを）聞いた日より、絶えずあなた方のために祈り、願っている。あなた方があらゆる霊的知恵と洞察によって、神の御心を知る知識を満ちあふれさせ、[10] すべて喜ばれるようにと主に相応しく歩み、あらゆる善き業において実を結び、神の認識において成長し、[11] 神の栄光の力に応じて、力を尽くしてあらゆる忍耐と寛容へと向かうことが出来るように。

私たちは喜びをもって、[12] あなた方を光の中にある聖徒たちの相続分に与る資格を与えた御父に、感謝を捧げている。[13] 御父は私たちを闇の権力から救い出し、その愛の御子の支配に移した。[14] 御子において、私たちは贖い、即ち、罪の赦し

を受けている。

[15] 御子は見えない神の似姿、
すべての被造物の中で最初に生まれた者（長子）である。
[16] 御子によって万物は創られた。
天上のものも地上のものも、
目に見えるものも、目に見えないものも、
王座も主権も、
支配も権力も、
すべては御子を通して、御子のために創造された。
[17] 御子はすべてに先立って存在し、
すべては御子において成立している。
[18] 御子はからだなる教会のかしらである。
御子は初めであり、
死者の中から最初に生まれた者（長子）であり、
すべてにおいて先んじる者となった。
[19]（神は）御子に充ち満ちているものが宿ることを望み、
[20] 御子を通して万物を御自身と和解させ、
地上の事柄であろうと、天上の事柄であろうと、
十字架の血を通して平和を創り出した。

[21] あなた方はかつて疎外された者たちであり、思いによって、また、悪しき業によって敵となっていたが、[22] 今は、御子がその肉の体における死によってあなた方を御前に聖なる、傷なき、責められることのない者と定めている。[23] 但し、あなた方が信仰に基礎を置き、土台を据えた者として留まり、あなた方が聞いた福音の希望から移ることがなければのことである。福音は天の下の全被造物に対して宣べ伝えられ、私パウロはその奉仕者となったのだった。

4.2. 文脈と全体的特色

コロ 1:9-23 は、コロサイ書の導入部の一部をなす感謝の祈り（1:3-23）の後半部にあたる[9]。直前に置かれた前半部の部分は（1:3-8）、パウロ書簡の慣例に従って、受信人の回心から現在に至るまでの信仰の在り方を思い起こしながら神に感謝している（I テサ 1:2-10 も参照）[10]。そこでは特に、彼らのキリストにある信仰と聖徒達への愛と天に蓄えられている希望が覚えられている（1:4-5）。初代教会において信仰者の基本的な姿勢として信仰、希望、愛ということが言われているが（I コリ 13:13）、ここでは、信仰、愛、希望の順序で言及されている（I テサ 1:3 を参照）[11]。三つの徳の中で最初に来ているのは信仰であるが、それはイエス・キリストへの信仰がすべての出発点であるからであり、信仰が現在に向かうと他者への愛として現われ、未来に向けられると究極の救いへの希望ということになる。

コロ 1:9-23 は感謝の祈りの拡張部分であり、受信人であるコロサイ人たちが信仰的認識において成長し、主の前に相応しく歩み、愛の業において実を結び、忍耐と寛容へと向かうように祈り求めている（特に、1:9-11 を参照）。1:12 において神は、「あなた方を光の中にある聖徒たちの相続分に与る資格を与えた御父」と呼ばれ、喜びをもって感謝の祈りが捧げられている（1:12）。ここでは、神がキリストを通して行った救いの業によって実現したことが念頭に置かれている。続く 1:13-14 の部分は、「御父は私たちを闇の権力から救い出し、その愛の御子の支配に移した。御子において、私たちは贖い、即ち、罪の赦しを受けている」と述べる。次第に叙述は神の御子キリストに集中して行き、キリストが神の似姿であること、創造の仲介、からだなる教会のかしら、死者の中からの最初に復活した者、十字架の血による平和と和解等の主題が、キリスト讃歌の形式をとった信仰告白として述べられる（1:15-20）。

最後に感謝の祈りの結びとして、二人称複数形（「あなた方」）の文体を用いながら、受信人であるコロサイ人達が、かつては神に離反し、悪しき思いや業によって神に敵対していたのに、回心後はキリストの死によって神との和解が与えられ、キリストへの信仰に留まり、福音が語る希望から離れることがないならば、御前に「聖なる、傷な

き、責められることのない者」とされていることが確認される（1:21-23）。

4.3. キリスト讃歌

神への感謝の祈りの後半部分（1:9-23）に含まれているキリスト論的な発言（1:15-20）は礼拝で用いられる讃歌的な信仰告白伝承を援用しながら、発信人と受信人達と共有するキリストについての共通理解を再確認している（ロマ 1:3-4 を参照）[12]。

受信人であるコロサイ人達は、神によって闇の力から解放されて、神の子の支配に移され（コロ 1:13; さらに、使 28:16; I テサ 5:4-5; エフェ 5:8; I ペト 2:9 を参照）、贖いと罪の赦しを受けたとされている（コロ 1: 14）。彼らの多数は異邦人信徒であり（コロ 1:27; 2:1-13; 3:10-11）、福音の言葉を受け入れることを通して、異教の神々を拝む生活を捨て、天地の創り主なる真の神に帰依することとなった（I テサ 1:9-10 を参照）。「主イエス・キリストの父なる神」であり（コロ 1:3）、「私たちの父」である方が（1:2,11）、創造主なる唯一の神であることを受信人たちが受け入れていることは、コロサイ書の神学的議論の暗黙の前提となっていた（使 14:15-17; 17:24-29; ロマ 3:30; I コリ 8:4-6）。コロ 1:15-20 は創造主としての神の存在と働きを前提にしながら、キリストの存在と働きに焦点を当て、神の救いの業に言及する際も、それがキリストを通して行われたことを強調する（1:19-20）。

キリスト讃歌によれば（1:15-20）、キリストは見えない神の似姿（εἰκών）であり (1:15a)、「すべての被造物の中で最初に生まれた者（πρωτότοκος、「長子」）」である（1:15b）。キリストが神の似姿であるという観念は、人間が神の似姿にかたどって（κατ’ εἰκόνα θεοῦ）創造されたという創世記の記事（創 1:26-27）をキリスト論的に解釈したもので、既に第二コリント書に見られる（II コリ 4:4）。キリストが見えない神の似姿（εἰκών）であることは、見えない神の本質が、キリストの人格のうちに目に見えるものとなっているということである[13]。そのことは神の意思が、キリストの言葉と行いを通して啓示されていることに他ならない（ヨハ 1:14,18; ヘブ 1:3 を参照）[14]。新約聖書において、神は見えない方であるということがパウロ書簡や公同書簡の一部に述べられる一方で（ロマ 1:20; I テモ 1:17; 6:16; ヘブ 11:27）、神を見た者はないことをヨハネ文書は強調する（ヨハ 1:18; I ヨハ 4:20）。旧約聖書において、神を見た者は死ぬとされ（出 19:20-25; 33:20-23; イザ 6:5）、特別なときに特定の人だけが神を見ることを許されていた（出 24:9-11; 33:11）。特に、預言者の召命物語において、神の幻を見る体験が召命の原体験として語られている（イザ 6:3-5; エゼ 1:26-28）。これに対して、新約聖書では神を見ることは終末の時に信徒に与えられる恵みであると理解されている（マタ 5:8; I コリ 13:13）。

他方、キリストがすべての被造物の中で最初に生まれた者（πρωτότοκος、「長子」）であるということは（コロ 1:15b; さらに、ロマ 8:29 を参照）、キリストが最初の被造物であると主張しているのでない[15]。旧約・ユダヤ教の知恵文学が知恵は最初の被造物であると述べているのに対して（箴 8:22; シラ 1:4; 24:9）、コロサイ書はキリストの先在を主張し、キリストは創られずして生まれ、天地創造の前から存在する方であると主張している（コロ 1:17 を参照）。天地創造以前の事柄は、旧約・ユダヤ教の伝統では、創世記の記述を出発点として、世界が存在するようになる過程についての知恵文学的な思索によって探求されて来た事柄である（創 1:1-2:4; 箴 8:22-31; 知 8:2-6; シラ 1:4-10; 24:1-22 を参照）。これに対して、キリストの先在の観念は、世界の創造におけるキリストの役割についてのヘレニズム教会の理論的思索によって生み出されたもので、フィリ 2:6 やヨハ 1:1 にも反映している。

キリストが創造の仲介者であるという思想は、ヨハ 1:3; I コリ 8:6; ヘブ 1:2 に萌芽的な形ではあるが、既に言及されている。コロサイ書はキリストによる創造の仲介の観念をさらに拡充し、先在のキリストは創造の仲介者であり（コロ 1:16-17）、「天上のものも地上のものも、目に見えるものも、目に見えないものも、王座も主権も、支配も権力

も、すべては御子を通して、御子のために創造された」と主張する（1:16; さらに、Ｉコリ 8:6 を参照）。「天上のもの」には、天使や霊的諸力が含まれている。神は目に見える自然や人間世界のみでなく、目に見えない天上の世界の創造主であり、すべては御子キリストを通して、キリストのために創られた従属的存在に過ぎない。従って、哲学的思弁に耽って世の諸要素（στοιχεῖα τοῦ κόσμου）を過大評価して、支配的霊力として礼拝することや（2:8, 20）、ユダヤ教の食物規定や祝祭日や新月や安息日を守ることや（2:16）、天使を礼拝することは（2:18）、被造世界に属するものへの囚われとして否定される（2:20-23）。

4.4. キリストの首位性と教会論

コロ 1:18 が主張するキリストが教会（ἐκκλησία）のかしらであるという思想は（1:18; エフェ 1:22-23; 4:15）、キリストがからだである世界のかしらであるという思想を教会論的に再解釈したものであり、Ｉコリント書が展開した教会論が基礎になっている（Ｉコリ 12:12-13）[16]。Ｉコリ 12:12-13 においてパウロは、教会がキリストのからだであるという喩えを用いて、肢体である信徒たちの多様性とからだである各個教会の一体性を主張している。これに対して、コロ 1:18 は世界中に広がる普遍的教会がキリストのからだであるとされており、抽象化・一般化が進んでいる（エフェ 1:22-23 を参照）[17]。

教会がキリストのからだであるならば、その論理的帰結としてキリストは教会のかしらであることになるが、Ｉコリント書はそのことにはまだ強調せず、明示的には述べていない。それに対して、コロサイ書やエフェソ書はＩコリント書において黙示的であったことを明示的にして、キリストは教会のかしらであると述べている。この明確化によって教会論的な喩えの強調点が移動して、キリスト論的側面が前面に登場し、かしらであるキリストの世界に対する首位性が強調される結果となった。

このキリスト讃歌によると、キリストは「初め（ἀρχή）」であり、「死者の中から最初に生まれた者（πρωτότοκος）」である（1:18; さらに、黙 1:5 を参照）。「初め（ἀρχή）」という言葉は、天地創造の初めを想起させるが（創 1:1; 箴 8:23）、この文脈においては、「死者の中から最初に生まれた者」という句と並置されており、創造における序列と共に最初の復活者という終末時の出来事における序列を示唆している（黙 1:5; 3:14 を参照）[18]。万物に先立って存在するキリストは（1:17 を参照）、死者の復活という終末的出来事においてすべての人に先立って復活したということである。パウロがキリストは「眠った者達の初穂（ἀπαρχή）として死者の中から甦った」と述べていることを（Ｉコリ 15:20）、コロサイ書の著者は別の言葉で言い換え、そのことが終末時における死者の復活の根拠となっていることを強調している。

4.5. 贖罪論 [19]

コロ 1:14 は、「御子において、私たちは贖い、即ち、罪の赦しを受けている」と述べて、キリストを信じる者が、贖いと罪の赦しの恵みに与っていることを簡潔な形で確認している。キリストが罪人のために死んだと解して、キリストの死に救済論的意義を認めることは、初代教会に遡る伝承に存在しており（ロマ 3:25; 5:6, 8; Ｉコリ 15:3）、最初期のキリスト教がキリストの死という悲劇的出来事に積極的な救済論的意義を見出すために行った神学的格闘の成果を示している。こうしたキリストの死の理解の形成にあたっては、旧約聖書の贖罪の表象（出 21:30; 30:12; レビ 5:5-6, 17-19; 9:1-21; 16:11-19, 29-34; 23:27-32; 民 35:31-34）、代価を支払って奴隷の身分にある者を請け出す奴隷の贖い（身請け）の表象や（出 21:8; レビ 25:48-51; 申 15:12-18）、他人の罪を代わって受けるイザヤ書 53 章の苦難の僕の姿（イザ 53:3-5, 10-12）、さらには、ヘレニズム・ユダヤ教が発達させた義人の死による民の罪の贖いの表象（IIマカ 7:37-38; IVマカ 6:27-29; 17:21-22 を参照）が複合的に働いたと推定される [20]。

旧約聖書においては、人が犯した罪に対して代

償（כפר; λύτρον）を払って償いをすることが認められている（出 21:30; 30:12; 民 35:31-32）[21]。罪の代償の観念が祭儀と結び付くと、会衆が犯した罪の代価として動物を屠って捧げる祭儀的贖罪の儀式となる（レビ 4:13-21; 5:5-6, 16-19; 9:1-21）。特に、主要な祝祭日の一つである大贖罪日には、毎年大祭司が内陣に入って贖いの座（כפרת; ἱλαστήριον）のところで、イスラエル人が一年間に犯した罪を贖う儀式を執り行った（レビ 16:11-19, 29-34; 23:27-32）。

他方、古代イスラエルには、代価を支払って奴隷の身分にある者を請け出す奴隷の贖い（גאלה; λύτρωσις）の制度があった（出 21:8; レビ 25:48-51）。特に、イスラエル人が困窮し、寄留者や滞在者のもとに身売りして奴隷となった場合は、本人はもとより兄弟等の近親者は代価を払って奴隷の身分から贖う（גאל; λυτρόω）買い戻しの権利が認められていた（レビ 25:48-51）。贖い行為は法的効果を持ち、贖われた者は隷属状態から解放され、自由の身となった。この表象は、イスラエルの民をエジプトの隷属状態から救出した、神の救いの業に転用されて、神はイスラエルの民を贖ったと述べられている（出 15:13; 詩 77[76]:16; 106[105]:10; 107[106]:2; イザ 63:9）。主は「贖う者（גאל; ὁ λυτρούμενος）」であり（イザ 41:14; 43:14; 44:24; 54:5, 8）、イスラエルは主に贖われた者達である（詩 107[106]:2）。かつてイスラエルを出エジプトの業によって贖った主は、現在と未来の苦難から民を贖うと考えられた（イザ 43:1; 44:22-24; エレ 31[38]:11）。

この表象は新約聖書に影響し、救いを解放（ἀπολύτρωσις）と表現したり（ルカ 21:28; ロマ 3:24; 8:23; I コリ 1:30; エフェ 1:7, 14; 4:30; コロ 1:14; ヘブ 9:15; 11:35）、贖い（λύτρωσις）と表現する例が見られる（ルカ 1:68; 2:38; ヘブ 9:12）。また、キリストの死を、多くの人々のための身請け金（λύτρον ἀντὶ πολλῶν）として自分の命を捧げることに喩える例もあり、注目される（マタ 20:28; マコ 10:45）[22]。

初期ユダヤ教は、紀元前 2 世紀中葉に起こったマカベア戦争の際の殉教者の死の意味を問うことを通して、義人の死が民族の罪を贖うという観念を発展させた（II マカ 6:28; 7:37-38; 8:21; IV マカ 6:27-29; 13:9; 17:21-22; 1QS 8.10 を参照）。第四マカバイ記によれば、敬虔なユダヤ教徒であるエレアゼルはこの世を去る前に、「神よ、あなたはご存じです。私が自分を望めば救うことも出来たのですが、この灼熱の苦しみの内に律法のために死ぬのだということを。あなたの民に恵みがありますように。彼らのための私たちの処刑を喜び下さい。私の血を彼らの清めとし、私の命をかれらの命に代えてお受け下さい」と祈ったとされる（IV マカ 6:27-29 私訳）。ここには、律法に忠実な義人の代理の死が罪を犯した民の替わりとして神に受け入れられるという考えが見られる。第四マカバイ記の著者は、律法に忠実な義人の死が、「民の罪の代価となった」と解釈し（IV マカ 17:21 私訳）、「これらの敬虔な人々の血と彼らの死による贖いを通して、神の摂理が躓いたイスラエルを救った」と述べる（IV マカ 17:22 私訳）[23]。

4.6. 十字架論の成立と展開[24]

キリストがローマ総督の手によって十字架刑に処せられたということは、共観福音書の受難物語や（マタ 26:2; 27:22, 23, 26, 31, 32, 35, 38, 40, 42; マコ 15:13, 14, 15, 20, 21, 24, 25, 27, 30, 32; 16:6; ルカ 23:21, 23, 26; 24:7, 20）、使徒言行録が伝える初代教会の伝道説教が証言する史的事実である（使 2:36; 4:10; 5:30; 10:39 を参照）。他方、共観福音書が伝えるイエスの勧告の言葉伝承は、比喩的表現の中でキリスト教徒が信仰故に負わなければならない苦難を十字架と表現している（マタ 10:38; マコ 8:34; ルカ 9:23; 14:27）、これは十字架を信仰者がこの世で負わなければならない苦難の宿命として捉えているが、その救済論的意義には言及しない[25]。

キリストの十字架に救済論的意義を認め、福音宣教の中心に置いたのは、パウロの独自な神学的貢献である（I コリ 1:18, 23; 2:2; ガラ 3:1）[26]。パウロによれば、キリストの十字架を宣べ伝える十字

架の言葉は、ユダヤ人には躓き、ギリシア人には愚かであるが、信じる者には、救いを得させる神の力であり、神の知恵である（I コリ 1:18, 23-24）。十字架に架けられたキリストを救い主として宣べ伝える宣教の言葉が、ギリシア・ローマ世界の人間にとって愚かであるのは、犯罪人として十字架刑に架けられ、悲惨な死を遂げた人物を信仰することが馬鹿げたことに見えたからである。ローマの歴史家タキトゥスは、皇帝ネロがローマの大火の責任を転嫁してローマのキリスト教徒を迫害した出来事を描写するにあたって、キリスト教を「有害きわまりない迷信」と呼んでいる（タキトゥス『年代記』15.44）。

これに対して、パウロはこの世の考え方からは、愚かにしか見えない十字架の言葉を強調することによって、人間的知恵を誇ることへの批判を展開する（I コリ 1:18-25）。ここでパウロが念頭に置いているのは、特別な霊的な知恵を持っていることを誇るコリントの熱狂的な信徒たちの姿勢である（I コリ 2:29, 31; 8:1-3, 7）。十字架に架けられた方を救い主として認めることは、既成の人間的知識の尺度では理解出来ない。それは、キリストの十字架の中に神の力、神の知恵の啓示を見出すことだからである（I コリ 1:18, 22, 24-25）。この人間の思いを越えた出来事を信じることは、神を知ることにおいて人間的知恵を断念することに他ならない。神は知者の知恵を空しくする（I コリ 1:19; イザ 29:14; 詩 33:10）。こうして、十字架の言葉は信じる者に対して、誤った福音理解を通して自己主張や自己義認をすることを放棄するよう迫る対決の原理として機能している。

パウロは、新約聖書の著者達の中で唯一、「十字架の躓き」（I コリ 1:23; ガラ 5:11）について語っており、躓きの問題はパウロの十字架の宣教の中で一つの重要な主題であったことに注意しなければならない[27]。十字架がユダヤ人達にとって躓きであった理由は、メシアの力あるしるし（= 奇跡）を求めるユダヤ人にとり（マコ 8:11-12 平行を参照）、十字架に架けられて死んだイエスは力あるメシアとは対極の弱さそのものであったことにある（II コリ 13:4 を参照）。従って、「十字架に架けられたキリスト = メシア」とは当時のユダヤ的メシア理解からみれば、背理であり躓きであった[28]。

ガラ 5:11 では、「十字架の躓き」の主題が、キリスト者も割礼を受けることが必要であるとする論敵の主張を論駁する文脈で展開されている。律法の遵守を中心に置くユダヤ的救済理解にとり、律法から自由なパウロの福音は（ガラ 2:1-10）ユダヤ教の教えの冒瀆に見えた。この点はガラテヤでは、キリストを信じる信仰を持つに至った異邦人キリスト者が、ユダヤ教の割礼の規定を遵らなければならないのかという問題に於いて先鋭化した（2:1-10; 5:2-12）。古い契約の神の民のしるしであった割礼を（創 17:9-14 のアブラハム伝承を参照）不要とする福音を宣べ伝えたパウロは（ガラ 2:7-9; 5:1-6）、旧約以来の伝統的神の契約の中の中心的規定をないがしろにする者として迫害を受ける事になった（5:11）。信仰のみを求めるキリストの十字架の宣教は（2:1-5）、古い契約の民にとり大きな躓きであった[29]。

他方、ユダヤ教の律法の視点からする十字架のもう一つの躓きは、「木に架けられた者はすべて呪われる。」という申 21:23 の規定である。申 21:23 の規定は、申命記本来の文脈では、死に当たるような重大な罪を犯して死刑に処せられた者の死体を、見せしめのために杭の上に架けることを内容としており、罪人を生きたまま十字架の上に架けて死に至らせる十字架刑の定めではない。しかし、ヘレニズム期以降、ギリシア人支配者やローマ人支配者たちによってパレスチナに十字架刑が導入され、十字架刑がパレスチナのユダヤ人たちにも知れるようになると、申 21:23 の規定が十字架刑を指すという解釈が、一部に見られるようになった（『ナホム書注解』1.7-8;『神殿巻物』64.6-12 を参照）[30]。この解釈によれば、生きたままであろうと死体としてであろうと木の上に架けられることは、神の呪いを受けることを意味する。こうした一部のユダヤ的理解にとり、十字架は神の呪いのしるしであった。パウロはこうした理解

を前提としながら、「キリストは自ら呪いとなって、律法の呪いのもとにある私達を贖いだした」（ガラ 3:13）という真理を対置したのだった[31]。

パウロは、コリントやガラテヤで伝道する当初から、十字架に架けられたキリストを宣べ伝えた（Ｉコリ 2:1-5; ガラ 3:1-5）[32]。パウロの十字架の宣教には、霊の力が伴い（Ｉコリ 2:4; ガラ 3:5）、十字架に架けられた主を信じた者たちは、霊の賜物を受けたのだった（ガラ 3:3）。パウロはガラテヤ書において十字架の言葉を対置することによって、律法、就中、割礼規定を守ることを強調する論敵たちの宣教は、究極のところ、イスラエルという民族的な出自を誇ることや、律法遵守という人間的な功績を誇る自己義認の試みであることを暴き出そうとしている。パウロが提示する十字架の言葉は、一切の人間的な誇りを断念し、神の霊の働きに自己を委ねることを勧める。この点でパウロの十字架論は、律法のわざによって義とされることを断念し、ただキリストを信じることによって神の前に義とされると理解する信仰義認論と軌を一にしている。パウロの十字架の神学は、信仰義認論の内容を別の言葉で表現したものであると言える。

4.7. 十字架の血

コロサイ書はＩコリント書やガラテヤ書の十字架論を出発点に取りつつ（Ｉコリ 1:18-25; ガラ 3:1-5）、キリストの十字架の血による万物と神との和解という宇宙的規模の十字架論を展開する（コロ 1:20）[33]。著者はキリスト讃歌の前後に付した解釈句の中で、信徒が神の子キリストの死を通して贖いと罪の赦しを受けていることを述べる（1:14, 22）。人間は思いと言葉と行いを通して神に離反し、その結果、全被造世界が神との敵対関係に陥っている（1:21; さらに、ロマ 1:19-22 を参照）。神と人間との関係を回復し、世界に和解と平和をもたらすためには、罪が贖罪の業によって取り除かれ、神が人間の罪を赦すということが不可欠であった（マタ 6:12; 26:28; ルカ 24:47; 使 2:38; 5:31; 13:38; ロマ 5:1-11; エフェ 1:7 を参照）[34]。

コロ 2:14 が法的なメタファーを用いて、神が人間の罪を赦す行為を債務証書を十字架に架けて破棄することに喩えているのに対して、1:20 は祭儀的メタファーの中でキリストが十字架上で血を流したことに言及する。ここで用いられている「十字架の血」という表象は、犠牲の血による祭儀的罪の赦しの表象や、契約の血の表象を背景としている（出 24:8; レビ 16:13-19; マタ 26:28 並行 ; ヘブ 9:11-21）。旧約聖書の大贖罪日の贖罪の儀式において、大祭司は、自らとその一族、さらには、イスラエルの民全体が犯した罪を贖うために、屠った雄牛の血を贖いの座の上に振りかけた（レビ 16:14, 18-19）。他方、シナイ契約の締結の際に、モーセは屠った雄牛の血の半分を祭壇に振りかけ、残った半分を「契約の血」として民に振りかけた（出 24:6-8）。このことが、新約聖書が伝える聖餐の設定辞において宣言される、「キリストの血による新しい契約」の観念の背後に存在している（Ｉコリ 11:25; ヘブ 9:11-21; さらに、マタ 26:28; マコ 14:24; ルカ 22:20 も参照）。

V. 結論：和解と統合の原理としての十字架

コロサイ書は旧約的な血による贖いや契約締結の表象を十字架論と結合させ、「十字架の血」が贖いと罪の赦しを与える結果、神と世界の和解をもたらしたという結論に到った。神は「御子を通して万物を御自身と和解させ、地上の事柄であろうと、天上の事柄であろうと、その十字架の血を通して平和を創り出した」のである（コロ 1:20; さらに、ロマ 5:1-11; エフェ 1:7; 2:13 も参照）。Ｉコリント書やガラテヤ書においてパウロは、論敵たちの自分とは異なる福音理解に対して、対決の原理として十字架の言葉を対置した（Ｉコリ 1:18-25; ガラ 3:1-5）[35]。コロサイ書にあっては、十字架論は贖罪論と結び付くことによって、赦しと関係の回復の契機を内包するようになった。そこでは、十字架論は対決の原理と言うよりは、世界に平和と和解をもたらす統合の原理として機能している[36]。

参考文献

青野太潮 『「十字架の神学」の成立』ヨルダン社、1989 年

同 『「十字架の神学」の展開』新教出版社、2006 年

田川建三 『新約聖書訳と注４　パウロ書簡　その二 / 疑似パウロ書簡』作品社、2009 年

原口尚彰 『パウロの宣教』教文館、1998 年

同 『新約聖書概説』教文館、2004 年

同 『ガラテヤ人への手紙』新教出版社、2004 年

同 「ガラテヤ書の十字架の神学」『テオロギア･ディアコニア』第 36 号（2004 年）41-60 頁

同 「パウロにおける十字架論と贖罪論」『基督教論集』第 48 号（2005 年）17-36 頁

同 『新約聖書神学概説』教文館、2009 年

同 「新約聖書の死生観」『人文学と神学』第 6 号（2014 年）1-22 頁

同 「パウロにおける愛の教説」『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第 1 号（2016 年）28-30 頁

M･ヘンゲル（土岐正策･土岐健治訳）『十字架』ヨルダン社、1983 年

外国語文献

注解書

Bornkamm, L. *Die Brief des Paulus an die Kolosser* (THKNT; Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2012).

Dibelius, M. *An die Kolosser, Epheser, an Philemon* (HNT12; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1953).

Dunn, J. D. G. *The Epistles to the Colossians and to Philemon* (NIGTG; Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1996).

Gnilka, J. *Der Kolosserbrief* (HTKNT10/1; Freiburg: Herder, 1980).

Hübner, H. *An die Kolosser, Epheser, an Philemon* (HNT12; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1998).

Lightfoot, J. B. *St. Paul' s Epistles to the Colossians and to Philemon* (London: Macmillan, 1875; (reprint) Peabody, MA: Hendrickson, 1995).

Lohse, E. *Die Briefe an die Kolosser, Epheser, an Philemon* (KEK 9/2; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1968).

MacDonald, M. Y. *Colossians and Ephesians.* (Sacra pagina 17; Collegeville, MN: Liturgical Press, 2000).

Maisch, I. *Der Brief an die Gemeinde in Kolossä* (TKNT 12. Stuttgart: Kohlhammer, 2003).

Pao, D. W. *Colossians & Philemon* (ZECNT 12; Grand Rapids, MI: Zondervan, 2012).

Schweizer, E. *Der Brief an die Kolosser* (EKK; Benzinger: Zürich; Neukirchen-Vluyn: Neuklirchener Verlag, 1976).

Sumney, J. *Colossians* (NTL; Louisville, KT: Westminster-J. Knox, 2008).

Thompson, M. M. *Colossians and Philemon* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2005).

Wilson, R. McL. *Colossians and Philemon* (ICC; London: T & T Clark, 2005).

Wolter, M. *Der Brief an die Kolosser. Der Brief an Philemon* (ÖTKNT12; Gütersloh:G. Mohn, 1993).

研究書

Aitken, E. B. *Jesus' Death in Early Christian Memory: The Poetics of the Passion* (Gõttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2004).

Barth, G. *Der Tod Jesu Christi im Verständnis des Neuen Testaments* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1992).

Bosch, J. S. "Der Hymnus Kol 1,15-20 in seinem früheren und seinem späteren Kontext," in *Kolosser-Studien* (hrsg. v. P. Müller; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2009) 23-32.

Brandenburger, E. "Kreuzigung und Kreuzestheologie," *WD* 10 (1969) 18-19.

Breytenbach, C. *Versöhnung: eine Studie zur paulinischen Soteriologie* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1989).

Cadwallader, A. H / M. Trainor. *Colossae in Space and Time: Linking to an Ancient City* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2011).

Canavan, R. *Closing the Body of Christ at Colossae* (WUNT II 334; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2012).

Clark, B. T. *Completing Christ's Afflictions. Christ, Paul, and the Reconciliation of All Things* (WUNT II 383; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015).

Cook, J. G. *Crucifixion in the Mediterranean World* (WUNT 327; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2014).

Crousar, C. B. *A Theology of the Cross: The Death of Jesus in the Pauline Letters* (Minneapolis: Fortress, 1990).

Dettwiler, A. "Das Verständnis des Kreuzes Jesu im Kolosserbrief," in *Kreuzestheologie im Neuen Testament* (hrsg. v. A. Dettwider / J. Zumstein; WUNT 151; Tübingen: Mohr, 2002) 81 - 105.

Dübbers, M. *Christologie und Existenz im Kolosserbrief*

(WUNT II 191; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005).

Frey, J. / J. Schröter (Hg.). *Deutungen des Todes Jesu im Neuen Testament* (WUNT 181; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005) .

Gordley, M. E. *The Colossian Hymn in Context. An Exegesis in Light of Jewish and Greco-Roman Hymnic and Epistolary conventions* (WUNT II 228; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2007).

Haldimann, K. "Kreuz – Wort vom Kreuz – Kreuzestheologie. Zu einer Begriffsdifferenzierung in der Paulusinterpretation," in *Kreuzestheologie im Neuen Testament* (hrsg. v. Dettwider / J. Zumstein; WUNT 151; Tübingen: Mohr, 2002) 1-9.

Haubeck, W. *Loskauf durch Christus* (Giessen: Brunnen, 1985).

Hoppe, R. *Der Triumph des Kreuzes* (SBB 28; Stuttgart: Katholisches Bibelwerk, 1994).

Kammler, H. C. "Die Torheit des Kreuzes als die wahre und höchste Weisheit Gottes. Paulus in der Auseinandersetzung mit der korinthischen Weisheitstheologie (1. Korinther 1,18-2,16)," *Theologische Beiträge* 44 (2013) 290 - 305.

Käsemann, E. et al., *Zur Bedeutung des Todes Jesu* (Gütersloh: Gerd Mohn, 1967) .

＝ E・ケーゼマン他（安積鋭二訳）『イエスの死の意味』新教出版社、1974 年

_____. "Eine urchristliche Tauflitergie," in *Exegetische Versuche und Besinnungen* (2 Bde; 2. Aufl.; Gõttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1967) I 34-51.

Körtner, U. H. "Exegese, Tod und Leben. Zur Hermeneutik des Todes und der Auferstehung biblischer Texte," *ZTK* 102 (2005) 312-332.

Kraus, W. *Der Tod Jesu Christi als Heiligtumsweihe. Eine Untersuchung zum Umfeld der Sühnevorstellung in Römer 3,25-26a* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1991).

Kuhn, H. W. "Jesus als Gekreuzigter in der frühchristlichen Verkündigung bis zur Mitte des 2. Jahrhunderts" *ZTK* 72 (1975) 1-46.

Luttenberger, J. "Der gekreuzigte Schuldschein: Ein Aspekt der Deutung des Todes Jesu im Kolosserbrief" *NTS* 51 (2005) 80 – 95.

Luz, U. "Theologia crucis als Mitte der Theologie im Neuen Testament," *EvT* 34 (1974) 120-131.

Merklein, H. "Der Sühnetod Jesu nach dem Zeugnis des Neuen Testaments," in: idem., *Studien zu Jesus und Paulus II* (WUNT 105; Tübingen: Mohr, 1998) 31-59.

Park, Sung-Ho. *Stellvertretung Christi im Gericht. Studien zum Verhältnis von Stellvertretung und Kreuzestod Jesu bei Paulus.* (WMANT 143; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2015).

Pizzuto, V. A. *A Cosmic Leap of Faith: An Authorial, Structural, and Theological Investigation of the Cosmic Christology in Col 1:15-20* (Leuven: Peeters, 2006).

Roloff, J. "Anfänge der soteriologischen Deutung des Todes Jesu," *NTS* 19 (1972/73) 38-64.

Samuelsson, G. *Crucifixion in Antiquity. An Inquiry into the Background and Significance of the New Testament Terminology of Crucifixion* (WUNT II 310; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2011).

Schenk, W. " 'Kreuzestheologie' bei Paulus?" in: *Ja und Nein. Christliche Theologie im Angesicht Israels* (hrsg. v. K. Wengst / G. Saß; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1998) 102-103.

Schrage, W. *Kreuzestheologie und Ethik im Neuen Testament* (FRLANT 205; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2004).

Settler, C. *Der Christushymnus. Untersuchungen zu Form, traditionsgeschichtlinem Hintergrund und Aussage von Kol 1,15-20* (WUNT II 131; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2000).

Sloyan, G. S. *The Crucifixion of Jesus: History, Myth, Faith* (Minneapolis: Fortress, 1995).

Söding, T. "Kreuzestheologie und Rechtfertigungslehre. Zur Verbindung von Christologie und Soteriologie im ersten Korintherbrief und im Galaterbrief," in idem., *Das Wort vom Kreuz. Studien zur paulinischen Theologie* (WUNT 93; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1997) 155 -158.

_____. *Das Liebesgebot bei Paulus* (Münster: Aschendorff, 1995).

_____. *Die Trias Glaube, Hoffnung, Liebe bei Paulus. Eine exegetische Studie* (SBS150; Stuttgart: KBW, 1992).

_____. *Nächstenliebe. Gottes Verheissung und Anspruch* (Freiburg i.B.: Herder, 2015).

Wilckens, U. *Jesu Tod und Auferstehung und die Entstehung der Kirche aus Juden und Heiden (Theologie des Neuen Testaments* Bd 1 *Geschichte der urchristlichen Theologie* Teilband 2; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2003).

Wischmeyer, O. *Liebe als Agape* (Tübingen: Mohr-

Siebeck, 2015).

Wright, N. T. “Poetry and Theology in Colossians 1.15-20,” *NTS* 36 (1990) 444-468.

Zager, W. “Wie kann es im Urchristentum zur Deutung des Todes Jesu als Sühnegeschehen?” *ZNW* 85 (1996) 179-182.

Zimmermann, R. “Die neutestamentliche Deutung des Todes Jesu als Opfer. Zur christologischen Koinzidenz von Opfertheologie und Opferkritik,” *KD* 51 (2005) 72-99.

Zumstein, J. “Das Wort vom Kreuz als Mitte der paulinischen Theologie,” in *Kreuzestheologie im Neuen Testament* (hrsg. v. A. Dettwider / J. Zumstein; WUNT 151; Tübingen: Mohr, 2002) 27-41.

注

1 本稿は 2016 年 2 月 10-11 日に国立オリンピック記念青少年総合センターを会場に開催された、ルーテル学院大学主催「第 50 回教職神学セミナー：十字架の神学：現代の宣教への脈絡から」において発表した聖書研究原稿に加筆訂正を施したものである。

2 青野太潮『「十字架の神学」の成立』ヨルダン社、1989 年、同『「十字架の神学」の展開』新教出版社、2006 年を参照。

3 原口尚彰「パウロ書簡における十字架の躓き」（以下、「躓き」と略記）拙著『パウロの宣教』教文館、1998 年、83-102 頁；同「ガラテヤ書の十字架の神学」『テオロギア・ディアコニア』第 36 号（2004 年）41-60 頁を参照。

4 A. H. Cadwallader, “A Chronology of Colossae/Chonai,” in *Colossae in Space and Time: Linking to an Ancient City* (A. H . Cadwallader / M. Trainor eds.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2011) 299-315; N. Sekunda, “Changing Patterns of Land-Holding in the South-Western Border Lands of Greater Phrygia in the Archaemenid and Hellenistic Periods,” ibid., 49-51 を参照。

5 C. E. Arnold, “Colossae,” *ABD* 1.1089-90; J. D. G. Dunn, “Colossae,” *NIDB* 1.701-702; E. J. Schnabel, *Early Christian Mission* (2 vols; Downers grove: IVP, 2004) 2.1236-48 を参照。

6 原口尚彰『新約聖書概説』教文館、2004 年、134-135 頁を参照。

7 リュコス渓谷沿いの３都市における初期キリスト教徒が置かれた状況については、P. Trebilco, “Christians in the Lycus Valley: the View from Ephesus and from Western Asia Minor,” in *Colossae in Space and Time*, 180-211 を参照。

8 同 134 頁。

9 パウロ書簡における「感謝の祈り」の修辞的機能については、原口尚彰「真正パウロ書簡導入部の修辞学的分析」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第 18 号（2000 年）25-43 頁を参照。

10 同 30-31 頁を参照。

11 詳しくは、T. Söding, *Die Trias Glaube, Hoffnung, Liebe bei Paulus. Eine exegetische Studie* (SBS150; Stuttgart: KBW, 1992) 63; F. Weiss, “Glaube, Liebe, Hoffnung. Zu der Trias bei Paulus,” *ZNW* 84 (1993) 196-217; O. Wischmeyer, *Liebe als Agape* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015) 88-91; 原口尚彰「パウロにおける愛の教説」『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第 1 号（2016 年）28-30 頁を参照。

12 E. Lohse, *Die Briefe an die Kolosser, Epheser, an Philemon* (KEK 9/2; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1968) 77-85; E. Schweizer, *Der Brief an die Kolosser* (EKK 12; Benzinger: Zürich; Neukirchen-Vluyn: Neuklirchener Verlag, 1976) 50-55; J. Gnilka, *Der Kolosserbrief* (HTKNT10/1; Freiburg: Herder, 1980) 51-58; M. Wolter, *Der Brief an die Kolosser. Der Brief an Philemon* (ÖTKNT12; Gütersloh:G. Mohn, 1993) 71-74; R. Hoppe, *Der Triumph des Kreuzes* (SBB 28; Stuttgart: Katholisches Bibelwerk, 1994) 146-150; J. D. G. Dunn, *The Epistles to the Colossians and to Philemon* (NIGTG; Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1996) 83-86; I. Maisch, *Der Brief an die Gemeinde in Kolossä* (TKNT 12. Stuttgart: Kohlhammer, 2003) 79-83; R. McL. Wilson, *Colossians and Philemon* (ICC; London: T & T Clark, 2005) 123-127; M. Dübbers, *Christologie und Existenz im Kolosserbrief* (WUNT II 191; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005) 84-86; M. E. Gordley, *The Colossian Hymn in Context. An Exegesis in Light of Jewish and Greco-Roman Hymnic and Epistolary conventions* (WUNT II 228; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2007) 170-190; J. Sumney, *Colossians* (NTL; Louisville, KT: Westminster-J. Knox, 2008) 60-62; J. S. Bosch, “Der Hymnus Kol 1,15-20 in seinem früheren und seinem späteren Kontext,” in *Kolosser-Studien* (hrsg. v. P. Müller; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2009) 23-32 を参照。

13 宗教史的背景としては、ヘレニズム・ユダヤ教文献において知恵が神のかたち（εἰκών）とされていることが挙げられる（知 7:26; フィロン『律法の寓意的解釈』I 43）。

14 Lohse, 86-87; Dunn, 89; Maisch, 108-109; Sumney, 64 を参照。

15 Lohse, 88; Schweizer, 58-60; Gnilka, 63; Wolter, 75-

76; Sumney, 64-65 を参照。

16 Dunn, 94-96; Sumney, 71 を参照。

17 Gnilka, 69; Wolter, 82; Maisch, 40-41, 44-45, 115; Wilson, 127; Sumney, 3-4, 71 を参照。これに対して、コロ 4:16 における「教会（ἐκκλησία）」はラオディキアにある具体的な会衆のことを指している。

18 Lohse, 97; Gnilka, 70-71; Dunn, 97-99; Maisch, 116; Wilson, 149-151; Sumney, 72-73 を参照。

19 詳しくは、原口尚彰「パウロにおける十字架論と贖罪論」（以下、「十字架論と贖罪論」と略記）『基督教論集』第 48 号（2005 年）18-23 頁；; 同「新約聖書の死生観」『人文学と神学』第 6 号（2014 年）9-10 頁を参照。

20 原口尚彰『新約聖書神学概説』教文館、2009 年、80-81 頁を参照。

21 H. Merklein, “Das paulinische Paradox des Kreuzes,” in: idem., *Studien zu Jesus und Paulus II* (WUNT 105; Tübingen: Mohr, 1998) 295-300; さらに R. Knierim, “ ‘asham’ Schuldverpflichtung,” *THAT* I 251-257 も参照。

22 J. Roloff, “Anfänge der soteriologischen Deutung des Todes Jesu (Mk.X.45 und Lk. XXII.27),” *NTS* 19 (1972) 38-64 を参照。

23 原口「十字架論と贖罪論」21-22 頁を参照。

24 原口「十字架論と贖罪論」23-27 頁を参照。

25 H. W. Kuhn, “Jesus als Gekreuzigter in der frühchristlichen Verkündigung bis zur Mitte des 2. Jahrhunderts” *ZTK* 72 (1975) 19-23; D. Sänger, “Der gekreuzigte Christus - Gottes Kraft und Weisheit(1 Kor 1,23f.),” in: *Paulinische Christologie* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2000) 163.

26 Kuhn, 28-29, 40; D. Sänger, “Der gekreuzigte Christus,” 174-177; U. Luz, “Theologia crucis als Mitte der Theologie im Neuen Testament,” *EvT* 34 (1974) 120-131; G. Barth, *Der Tod Jesu Christi im Verständnis des Neuen Testaments* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1992) 117-121; 原口尚彰「パウロのガラテヤでの伝道説教」『パウロの宣教』教文館、1998 年、64-82 頁 T. Söding, “Kreuzestheologie und Rechtfertigungslehre. Zur Verbindung von Christologie und Soteriologie im ersten Korintherbrief und im Galaterbrief,” in idem., *Das Wort vom Kreuz. Studien zur paulinischen Theologie* (WUNT 93; Tübingen: Mohr, 1997) 155 -158; W. Schenk, “ ‘Kreuzestheologie’ bei Paulus?,” in: *Ja und Nein. Christliche Theologie im Angesicht Israels* (hrsg. v. K. Wengst / G.Saß; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1998) 102-103; J. D. G. Dunn, *The Theology of Paul the Apostle* (Grand Rapids: Eerdmans, 1998) 233; D. Sänger, “Der gekreuzigte Christus - Gottes Kraft und Weisheit (1 Kor 1,23f.),” in: *Paulinische Christologie* (eds. U. Schnelle / T. Söding; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2000) 173; M. J. Gorman, *Cruciformity: Paul’s Narrative Spirituality of the Cross* (Grand Rapids: Eerdmans, 2001) 76-77 n.6; K. Haldimann, “Kreuz – Wort vom Kreuz – Kreuzestheologie. Zu einer Begriffsdifferenzierung in der Paulusinterpretation,” in *Kreuzestheologie im Neuen Testament* (hrsg. v. A. Dettwider / J. Zumstein; WUNT 151; Tübingen: Mohr, 2002) 1-9; J. Zumstein, “Das Wort vom Kreuz als Mitte der paulinischen Theologie,” in *Kreuzestheologie im Neuen Testament*, 32-33 を参照。

27 十字架の躓きの問題についての詳しい分析は、原口尚彰「パウロ書簡における十字架の躓き」（以下、「躓き」と略記）拙著『パウロの宣教』教文館、1998 年、83-102 頁；同「ガラテヤ書の十字架の神学」『テオロギア・ディアコニア』第 36 号（2004 年）41-60 頁を参照。

28 原口「躓き」84-87 頁。

29 原口「躓き」87-90 頁。

30 J. M. Allegro, “Further Light on the History of the Qumran Sect,” *JBL* 75 (1956) 89-95; Y. Yadin, “Pesher Nahum (4QpNahum) Reconsidered,” *IEJ* 21 (1971) 1-12; G. Jeremias, *Der Lehrer der Gerechtigkeit* (SUNT 2; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1963) 131-35; J. A. Fitzmyer, “Crucifixion in Ancient Palestine, Qumran Literature, and New Testament,” *CBQ* 40 (1978) 488-502; Kuhn, 33-36; G. Barth, 12-13; Merklein, 286-289; Merklein, “Das paulinische Paradox,” 286-289; 原口尚彰『ガラテヤ人への手紙』新教出版社、2004 年、145-148 頁を参照。

31 Kuhn, 33-36; Merklein 292-293, 297; D. Sänger, “>>Verflucht ist jeder, der am Holze hängt<<(Gal 3,13b). Zur Rezeption einer frühen antichristlichen Polemik,” *ZNW* 85 (1984) 279-284.

32 拙稿「パウロのガラテヤでの伝道説教」『新約学研究』第 22 号（1994 年）30-32 頁（＝拙著『パウロの宣教』教文館、1998 年、66-68 頁）；D. Sänger, “Der gekreuzigte Christus,” 174-175 を参照。

33 Gnilka, 74-76; Sumney, 76-79 を参照。

34 コロ 2:14 は、罪の赦しを債務証書を十字架に架けて取り除くことに喩えている。

35 Lohse, 103 は、十字架の言葉（I コリ 1:18）と和解の言葉（II コリ 5:19）の間に存在する機能の相違を十分に理解していない。

36 これに対して、Hoppe, 215-218; V. A. Pizzuto, *A Cosmic Leap of Faith: An Authorial, Structural, and Theological Investigation of the Cosmic Christology in Col 1:15-20* (Leuven: Peeters, 2006) 248 は勝利の

契機を強調している。

Peace through the Blood of the Cross
An Exegetical and Theological Study of Colossians 1:9-23

Takaaki Haraguchi

The author of Colossians took over St. Paul's theology of the Cross and developed it in a very unique way. He interpreted the meaning of Christ's death on the Cross in association with ritual blood shed for redeeming sins (see Leviticus 16:13-19 etc.). He thus reached the conclusion that Christ's blood shed on the Cross brought about reconciliation between God and the whole world. "Through him (=Christ) God reconciled all things with Himself, making peace through the blood of his Cross" (Colossians 1:20; see also Romans 5:1-11: Ephesians 1:7; 2:13).

In 1 Corinthians and Galatians Paul employed the word of the Cross as a means of confrontation to refute false understandings of the gospel. But in Colossians the author refers to the Cross of Christ as an epoch-making event to realize reconciliation and peace in the world.

Keywords: Colossians, Cross, ritual, reconciliation, peace